

奪われたホプキンス

いつの世も、貧富の差はどこかで生まれ、そしてそれを引き金に悲しい争いが起きるものだ。

人は富を求め、その為に努力する。そこまでは非情に素晴らしい事。しかし自分の得た富、あるいは与えられる富を「標準」に考えてしまうから摩擦が生じる。

例えば、苦勞して稼いだ一万メセタと、無償で与えられた一万メセタの価値は、通貨としては全く同じ物だ。しかしその金を手に入れるまでの経緯や使い道、そして様々な生活事情を考慮すると、同じ一万メセタでも人によって本当の価値は変わってくる。

この金銭に対する考え方の違いが、貧富の差

という一つの物差しになるだろう。

「そもそもさ」

いつもの店、喫茶「ブレイク」で、いつものようにアッシュは愚痴っていた。

「使える金に限りがあるから、武器を買うのもいちいち悩んだり我慢したりしなきゃなんねーんだよなあ」

当たり前の話を、さも理不尽だと主張する。

「武器つてのは、俺達の商売道具だぜ？それが自由に選べねえつてのが、間違ってるぜ」

間違えているのはお前の頭ん中だ。愚痴の相手として同席させられているジッドは、アッシュにそう言つてやりたかったが、そうすればまた愚痴の量が増えるだけなのを承知しているだけに言葉を飲み込んだ。

「あーあ、どこぞのお坊ちゃんみてえにさ、俺も「パパ」とやらにおねだりしてえなあ……」

横に座っているジッドを見ながら、ウダウダ

と愚痴り続けるアツシユ。

「……男に「パパ」と呼ばれるのは、寒気がするだけだぞ」

だからといって、年若い女性に「パパ」と呼ばれるのも、それはそれで問題なのだが。

「ジツドお、スタツグカツトラリ欲しいよお、ツインブランド欲しいよお……あー、流星棍でもデモリツシユコメツトでもいいからあ。なんだったらダブルカノンでもいいからさあ」
「ええい、野郎が甘えた声出すんじゃない！しかもむちゃくちゃな事ばかり言いやがってお前は！」

振り上げた拳で、ジツドはわがまを黙らせた。

「なに殴る事ねえじゃんかよお……」

悪ふざけも度が過ぎると、不快でしかない。

それを思い知らせるには、痛みというのが最も効果的という事だ。

「あーあ、俺もダブルカノンとか迅雷とかがあれば、もつと格好良くバリバリ依頼をこなせるのにさあ……」

その前にそれを扱うだけの腕がないだろう。そう言つてやりたいところをまた、ジツドは飲み込み我慢した。

「ぜつてえおかしいぜ、世の中つてのは。武器にしたつてお金にしたつて、欲しがつてる奴の所には全然ねえくせに、使えもしねえ汗ダルマみてえな奴んここに集まるつてのはさあ」

不幸かどうかはともかく、貧富の差から生まれる摩擦は、こうした貧しい者から富を得ている者への、一方的で身勝手な恨みから生じる事がある。もつともこの場合、富を得ている側が無駄に使えない武器を欲しがり、無くし、そしてあつさり興味をも無くす事を繰り返すその態度と行動から生じているとも言えるのだが。
「馬鹿な事ばかり言つてるんじゃない。ホプキ

ンス君をうらやましがる暇があつたら、まずハ
ンターとして一人前になる努力をしろ」

ジツドの前向きな考えはもつともだが、アツ
シュにしてみれば「努力してるのに」という反
発材料になりかねない。だが、さすがにそろそ
ろ釘を刺し愚痴を止めなければならぬのだろ
う。この手の愚痴は、止まる事ととを知らないのだ
から。

まだ言い足りないとかばかりに脹れるアツシュ
だが、さすがに不満を顔に出すだけに止めてい
た。

例え愚痴を続けようとしていたにしても、そ
れを遮られる事になるのだが。

「あ、あの……アツシュ・カナン、あなたがア
ツシュさんですか？」

不意に、一人の女性から声をかけられた事で。



「ホプキンスさんが誘拐ですって!？」

「それホントなの？アツシュ」

店で声をかけてきたニューマンの女性がアツ
シュに語った話は、衝撃的な事件だった。

「どうもそうらしい。俺も初めて聞いた時は驚
いたけどな……」

ホプキンスが誘拐された。アツシュは女性か
ら聞いた事件の知らせを、ウェイインズ姉妹とマ
アサ・グレイブにもすぐ知らせた。

それは協力を願う意味も含め。

「こちら、バレッタさん。ホプキンスの……な
んて言えばいいんですかね？」

声をかけてきた女性、バレッタを三人に紹介
しようとしたアツシュだったが、彼にもバレッ
タとは初対面だった為、うまく紹介出来なかつ
た。

「主にホプキンスおぼっちゃまのお世話をさせ
て頂いております。メイド……とは少し違うの

ですが、似たようなものだと思つて頂いて結構です。不肖未熟ふしようの身ですが、よろしくお願い致します」

深々と頭を下げるバレッタにつられ、三人はお辞儀を返した。マアサは慣れたものなのだろうが、姉妹は少しきこちなく頭を下げている。

「アツシユさんから話がありました通り、おぼつちやまが誘拐されました……皆さんに救助をお願いしたいと、こうしてお願いに参りました」

再び頭を下げるバレッタ。どうやら、誘拐騒動は事実のようだ、改めて実感した。

「おぼつちやまからは、万が一何かあつた時は親友あつしゆのアツシユさんを頼れと申し使っておりまして……なにとぞ、ご助力よろしくお願い致します」

バレッタの言葉にある、大きな誤りを訂正したいアツシユだったが、今はそのような事を言うべきではないと言葉を飲んだ。そんなアツシ

ユの様子とバレッタの言葉に、ウェインズ姉妹は苦笑いを浮かべるだけだった。

「それで……私達はどうすれば？」

事が事だけに、いくらホプキンスとはいえ助けなければならぬだろう。事件解決に協力する事は異論ないが、果たして何をすれば良いのか？

「私と一緒に、犯人が指定したポイントまでご同行願います」

バレッタの話では、犯人からは指定したポイントにて現金の受け渡しを要求されているという。そのポイントとは、ラグオル洞窟エリアの一角だった。

「よし、それじゃさっさとそこまで行って、犯人をとつ捕まえようぜ！」

ホプキンスを助けると言うよりは、犯人を捕まえるという「ハンターらしい活躍」を思い描きながら、アツシユは声高に出發を宣言した。

「ちよつと待つてアツシユ君」

だが、その勢いにクロエが水を差した。

「なんだよ、クロエ」

折角盛り上がってきたところを止められ、少し不服そうにアツシユが訪ねた。

「……犯人の真意が見えないのよね……」

「……ん？どういう事だ？」

犯人は金欲しさにホプキンスを誘拐し、指定の場所まで金を運ばせ人質と交換する。真意も何も、犯行の動機としては全て整っているし、怪しいところは何もないとアツシユは感じていた。だがクロエは、それがおかしいと言いつつ出したのだ。

「よく考えて、アツシユ君。犯人は現金の運搬方法を指定していないのよ。これっておかしいとは思わない？」

「どこが？アツシユはクロエの言いたい事が理解出来ず、首をかしげるだけだ。」

「ホプキンスさんはあの公明なコレクターパガニーニ卿のご子息。だからこそ金銭を要求するのは筋が通っているけど、息子の為にあらゆる手段を使って犯人を捕らえようとするのが普通でしょう。だったら犯人は、まず人質を取っている利点をうまく使いながら、安全に現金を手に入れる事を考えるはず」

クロエの説明にまだ理解が出来ないのか、アツシユの首は傾いたままだ。

「現金の輸送方法を指定してこない、つまりこんな風にハンターを数名連れて来ても構わない状況を犯人が作ると思う？私だったら、バレツタさん一人であるように指定するか、取引場所を考慮してハンター一人だけにするわ」

ここでようやく理解したのか、あーと声を出しながらポンと手を軽く叩くアツシユ。そして同じ動作をアナもしていた。

「そっか。確かにクロエの言う通りね。ねえバ

レツタさん。犯人はそのへん何も言っただけでこなかったの？」

もっと細かい情報を得ようと、アナは直接犯人と連絡を取り合ったバレツタに訪ねる。

「えつ……その、えつと……」

急に質問をぶつけられた為か、あるいは何か話せない別の事情があるのか。バレツタは答えを言い淀^{とま}んでいる。

「……何か罠を仕掛けているのは当然でしょうけど、他に目的があるのかも……」

「！そう、他の目的、そんなんですよ！それなんです」

考え込むクロエの言葉を聞き、バレツタは突然思いついたかのように話し出した。

「犯人の目的は現金と、そして私なんですよ」

思わぬ告発に、一同は驚き続く言葉を待った。

「ほら、私って美しいでしょ？」

脈絡のない告発と感じた一同は、声をそろえて短く聞き返してしまった。

「だからよくナンパされやすいんです。ナンパはお断りよって何度言っても、皆さんしつこく声をかけてきて……犯人はたぶん、この私をナンパしたいが為にこのような……ああ、ホプキンスおぼっちゃま、申し訳ございません。私が美しいが故にこのような事に巻き込んでしまつて……」

あのホプキンスを世話をしているだけに、すっかりした人なのだろうと一同は思っていたのだが、どうやら逆に、あのホプキンスを世話出来るだけの人、という事らしい。

「……とにかく、罠を仕掛けて待っているのは間違いないと思うの。十分気を付けてね」

「あ、ああ。そうだな」

少しばかり熱意を奪われた感はあるが、しかしそれでもホプキンスが誘拐されたのは事実。

バレッタはニューマンとして非情に珍しく、レンジャーレニューエールを生業なりわいとしていた。ニューマンはヒューマンに比べ性格的に大ざっぱな方だと言われており、射撃のような命中精度を重視される分野は苦手だとされている。だがそれは全体的な統計であり、中にはそういった分野を得意とするニューマンも存在する。それに一流のハンターならば、たとえ専門がレンジャーでなくとも、短銃ハンドガンの一つぐらい使いこなすものだ。

事実、前線で戦うアナの短剣ダガーは外すことなく敵を切り裂き、その後ろから投げつけられるクロエの投剣スライサーも、狙った敵全てを貫いている。さてバレッタの腕前だが、申し分ない腕と言わなければならない。

確かにレンジャーと呼ばれる他のハンター達と比べれば、若干反応の鈍いところもあるようだが、新米のレンジャーなどに比べれば随分と頼れる存在だろう。少なくとも、アッシュが敵

の群れに突っ込んでいるのを良くフォローしているのだから、それ相応の腕であると言える。

「……護衛すべきバレッタさんに援護されてどーすんのよ、アッシュ君は」

まったく全くその通りである。

一行は化け物エネミーの妨害こそあれ、これといった「畏」らしき物にはまだ遭遇していない。

現在洞窟の第二階層。犯人が指定した場所ポイントまです、ほんのわずかである。

「……どう思う？」

とクロエが一同に尋ねた。

「……どうって？」

とアッシュが返した。

このメンバーでは、状況を深く理解し考察を巡らせるは自分だけなのだなど、改めてクロエは痛感した。

「あの……やっぱり、ここまで何も無いのはお

かしいですよ……ね？」

控えめに、マアサが意見を述べる。

まだ正式にハンターとなつて日の浅いマアサは、先輩達の前で自分からあれこれと発言するのを控えていた。半人前の自分は、まだ口出しをするには早すぎると思つての事。

しかし何も感じないアツシュと何も考えないアナに気苦労を重ねるクロエを見て、さすがにかわいそうだと思つたのだろう。マアサにしてみれば、随分と勇気のいる発言だったはずだ。

「そう、そうなのよ！マアサちゃん偉い！」

クロエの喜び様を見て、発言して良かったと思つた反面、それだけ気苦労耐えなかつたのかと涙すら誘われるマアサ。表情にするなら、苦笑いといったところだ。

「……こほん。とにかく、ここへ来る前にも言つた通り、誘拐犯にしては計画が浅はかすぎるわ。もし誘拐犯がそこまで浅はかでないとする

ば、この先に罫を張ることになるけど……」

クロエはバレッタに向き直り、言葉を続けた。

「指定した場所ポイントそのものが罫……という事も考えられますよね？」

緊迫した空気。陳腐ちんぷな表現だが、まさにそんな空気を肌で感じる。

「……突然、何を言い出すんですか。クロエさん」

二人の様子を見つめる三人。

マアサはドキドキと

アナはワクワクと

アツシュは疑問符を飛ばしながら、見つめていた。

「一つ確認させて下さいバレッタさん。あなた本当にホプキンスさんのメイド？」

クロエはここに来て確信した。いや、初めからバレッタを疑っていた。

だが、今までは決め手がなかった。しかも誘

拐という事件性を考えると、ホプキンスの身を
考え時間をかけて調べるわけにもいかない。ま
ずはバレッタを信じてついて行くしかなかった
が、ここまで畏らしい畏がない事を考えると、
クロエにはもはやこう考えるしか他になかつ
た。

この誘拐劇は、自分達をおびき寄せる為に仕
組まれた罠なのでは？と。

だとしたら、狙われているのはブラックペー
パーと関わってしまったアナか、有名な科学者
を両親に持ち、それなりに資金と情報を握って
いるマアサか。

「もちろん。私はホプキンスおぼっちゃまのメ
イドです。証明しろと言われましても、今すぐ
にとは難しいのですが……」

一番良い方法は、パガニーニ卿と連絡を取り
確認する事だ。だがそれは事前にバレッタが否
定していた。卿は忙しい為に連絡が付きにくく、

また犯人からパガニーニには知らせるなど言わ
れているから、と。

「……判ったわ。ごめんなさいね、疑ったりし
て」

ここで追求する事も出来るが、あまりごねる
とホプキンスの身が危なくなる可能性が出る。
ならば、ここは流した方が無難だ。

そもそも、ここで鎌をかける事がクロエにと
って重要だったのだ。

相手が尻尾を出してくれれば良し。それが叶
わなかったとしても、何も感じないアッシュと
何も考えないアナ、そして疑う事を知らないマ
アサに警戒させる事が出来る。

（アナとマアサちゃんを守り通すわ。何があつ
てもね）

この際、アッシュはどうでもいい。

もとい、

アッシュほどの腕があれば、自力で切り抜け

イなものよとか言うんだもん。でもでも、僕とアツシユはそんな事無いよって言ったんだ」

そしてアナも気づき、やはり溜息をつく。

アツシユは、まだ少し状況を理解していないが、しかし自分にとって面白くない事をされたのは感じ取った。

そもそも、親友だとか、この底抜け油ダホルプマキに言われるだけで虫ずが走るといふのに。

「だったら狂言誘拐をでっち上げて試してみようよってバレツタが」

決定打を口にした事で、アツシユの怒りは頂点に達した。

濃厚なマアサはこの状況をなだめたいところだが……新米ハンターの彼女では、もはやどうする事も出来ないだろう。

「いいよねえ、こういう無償ムクの友情ユウジって。やつぱりさ、世の中お金だけじゃダメだよ。そう思うでしょ？アツシユ……アツシユ？」

いつの世も、貧富の差はどこかで生まれ、そしてそれを引き金に悲しい争いが起きるものだ。それは自分の得た富、あるいは与えられる富を「標準」に考えてしまう事で生じる摩擦が火種となる。

無償の友情を口にし絶賛するホプキンス。富のありがたさも、友情のなんたるかも到底理解していないだろうこの脂肪肝ホの固まりプに対し、欲しい武器も手に入らない貧しいアツシユが、生まれてからこれまで、必死に生き延びてきた貧しいウエイズ姉妹が、彼に殺意を抱いたとしても、何ら不思議ではないだろう。

洞窟は閉鎖された空間だ。故に絶叫が良く響く。

願わくば、せめてマアサの「あの、本当に死んじやいます……死んじやいますってばあ！」という声が、彼らの耳に届きますように。